



山形県東田川郡田麦俣の集落 平成17年撮影



田麦俣の多層民家 平成17年撮影



田麦俣の民宿の夕食に上がった山菜料理 平成17年撮影

いまや多層民家で知られる田麦俣の民家は、民宿と資料館としてこの地に2棟だけ残されている。この民宿は、4月から11月までの雪のない期間だけ営業する。山で宿の主人が採ってきたという山菜や筍でお膳は彩られ、ここにも春の到来の喜びに満ちていた。翌月には雪で傷んだ部分の屋根を葺き替えるということであった。季節の移り変わりに即した生活風景が、この地にはまだ残されていた。

田麦俣へ向井潤吉は春に2度訪れている。山形でも山あいの窪地のような集落にも、遅ればせながら春の光が降り注ぐ。向井潤吉は、こうした情景を深い関心をもって制作している。風景に加えて、出会った村人のスケッチも数多く描いている。

春を求めた東北の旅

田麦俣で出会ったような春のすがたに魅了された向井潤吉は、東北各地を毎年巡っている。殊に岩手県は盛岡周辺の玉山村、滝沢村、雫石など、岩手山麓にある村と、北上盆地の紫波、花巻、そして釜石線沿線の東和、宮守、遠野といった地名が目立つ。

「東北の春は数歩おくれて、しかもゆっくりとやってくる。花巻から遠野までの途次、私は万花一斉に咲きほこる草原に立った。甘酸っぱい匂いと色がそこはかと漂っているようであった。」

(向井潤吉『日本の民家』前掲)

このように、向井潤吉は他所では味わえぬ東北が迎える春の到来を心から賛美している。

《春映》は、岩手県上閉伊郡宮守村で取材された風景である。

「花巻から遠野の間には、こんなごくありふれた眺めが続く。そして少しおくれた春に追いつくかのように、低い山並みも森も花も草も一斉にはしゃぎ、光を吸い匂いをまき散らして蕩々たる気が漂う。」

(向井潤吉『日本の民家』前掲)

向井潤吉はこの地を訪れ、輝きに満ちた春の印象を、触れたものすべてから感じとっていることがわかる。

空は霞たなびき、淡い山桜の花で粧われた春山の麓には、まるでささやきあうように草屋根の民家が寄り添う。万物に降り注ぐ春の光は、新しい生命を芽吹かせ、歓喜に満ちた情景を一面に広げる。

向井潤吉が、ここで出会った春の情景は、光の鮮烈な印象が強かったのであろう。水を張って田植えを待つ水田には、その輝かしい光によって民家と春山を明るく映し出す。

さらに、水田を広く画面に捉えて作品を構成したことから推せば、この水田がこの情景の根源を担っている存在であると、向井潤吉は読み取ったのではないだろうか。季節の変化と関わりの深い農作業にとって、春の訪れは、農耕開始の時季であり、豊作を願う特別な季節である。人と自然が深く関わり合いなが営まれる稲作が、いよいよこの年も始まろうとすることを祝うように、描かれた水田の存在は貴く輝いている。水田に映しこまれた、空(天候)、山(森林)そして民家(人)が生活の源であることを向井潤吉は示唆し、この土地が迎えた生き活きとした季節を讃えているようだ。

季節と取材地

向井潤吉の春に取材した作品から、武蔵野と東北を取り上げてみた。いずれも、向井潤吉が繰り返し、何度も足を運んでいる地域である。季節を違えてまた来ようということもあろうが、同じ春に、同じ場所へ毎年訪れることは、向井潤吉の制作の特色である。

昭和36年から昭和63年に至るまでの27年間、向井潤吉は赴いた先々で制作した作品の記録を日誌として残した。この制作日誌から向井潤吉の制作地と季節の関係、傾向を読み取ることができる。



《春映》岩手県上閉伊郡宮守村 昭和51年(1976)